

留学とマイノリティ経験



アサヒグループホールディングス

立木 彰（ついき あきら）

Executive Officer, Head of Business Development

- 1973年岐阜県大垣市で出生。高校生まで岐阜の山間部で育つ
- 1995年滋賀大学経済学部経済学科、1997年University of Oregonを卒業
- 1997年に国内家電メーカーに入社、営業とマーケティングに従事
- 2000年に米国通信会社の日本法人に転職、マーケティング、経営企画に従事
- 2008年に現アサヒグループホールディングス株式会社に入社、海外事業とM&Aに従事
- 2017年～2024年の7年間チェコと英国に7年駐在
- 2024年4月日本帰任、M&A、提携、再編、事業開発を担当



- 留学を決意した理由は「日本での就職活動」と「教授との出会い」
- 留学準備にあたり最大のハードルは「親の説得」と「資金」
- 日本と米国の学生生活の違いは、「課題の量」と「高い目的意識」



- 限られた選択肢での就職活動
- 留学期間に加え、大半が4月入社のため、キャリアプランのさらなる遅れへの不安
- 留学経験不要の職場に配属、その後専門性の低さを痛感し、28歳で外資系に転職



- 地方においても留学関連情報が容易に入手できる環境
- 多種多様な学生に獲得チャンスがある幅広い奨学金
- フレキシブルな入社タイミング
- 新卒学生の専門職採用と、その後のエキスパート育成制度

語学力、異文化理解、人脈、度胸だけではなく、マイノリティになることによって得た「癖」は、今の仕事にも活かされている

- 入学当初、あまりに英語ができないため、教授から学部変更もしくは日本帰国の提案
- 相談できる相手もおらず、自分の性格、能力、適性などに向き合い考え続けた結果、継続を決断し、なんとか無事卒業

まずは自分と向き合う癖

- 授業の一環で、塗料メーカーの販促コンペにチームで参加
- 米国出身者がチーム大半を占め、大多数意見に流されそうに
- 少数意見をなんとかプランに組込んでもらい、コンペに勝利

当たり前を疑う癖

- 授業で、少しずつ自分の意見が言えるようになると、ほぼ無視状態だったクラスメートからの助け舟が出るように
- 周りの助けにより、膨大な課題も効率的にこなせるようになり、加えてマイノリティでいることのベネフィットも実感

頼ることをためらわない癖



Thank you!